

イキガミ

2008(平成20)年9月3日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督・脚本＝瀧本智行／原作＝間瀬元朗『イキガミ』（小学館刊）／出演＝松田翔太／塚本高史／成海璃子／山田孝之／柄本明／劇団ひとり／金井勇太／佐野和真／井川遥／笹野高史／風吹ジュン（東宝配給／2008年日本映画／133分）

……「国家繁栄維持法」の下では、1000人に1人の確率でイキガミ（死亡予告証）が配達！ なぜ俺が……？ なぜ私が……？ そんな死への恐怖感こそ生命の価値を再認識させるもの……？ たかがコミックと侮ってはダメ。バカバカしい総裁選（？）にうつつを抜かしている今こそ、この映画が見せる壮大な世界観、国家観、人間観をじっくり検討しなければならないのでは……。



「国家繁栄維持法」とは？

この映画のポイントは「国家繁栄維持法」。ドイツにおける1930年代のナチス台頭の思想的バックボーンは国家社会主義だったし、ナチスを支えた有名な法律が1933年に成立した「断種法」。また、日本が1930年代に急速に軍国主義化していくについては、「治安維持法」や「国家総動員法」が大きく寄与したことは明らかだ。それと同じように、現在のニッポン国には国家繁栄維持法が施行されていた……。

この法律が義務づけたのが、小学校入学直前にすべての児童に対する「国繁予防接種」。これは、そのアンプルには1000人に1人の確率で特殊な「ナノ・カプセル」が仕込まれ、そのカプセルが18歳から24歳までの若者の体内で、あらかじめ設定された日時に肺動脈内で自動的に破裂し、その命を奪うという、物騒なもの。なぜ、そんな法律を……？ その狙いは……？

それは、平和な社会に暮らす国民に対し、「死」への恐怖感を植えつけることによって「生命の価値」を再認識させるため。すなわち、誰にカプセルが注入されたかを知ることができないから、国民はすべての死亡予定の年齢が終わるまで「自分は死ぬ

のでは」という危機感を常に持ちながら成長することになる。その「危機感」こそが「生命の価値」に対する国民の意識を高め、社会の生産性を向上させるという考え方だ。さて、そんな価値観が支配する社会になると、国民の自由な意見の表明は……？

イキガミとは？ イキガミ配達人とは？

プレスシートにはイキガミのサンプルがついているから、それに注目！ 通称「イキガミ」（逝紙）、正式名称「死亡予告証」とは、国家繁栄維持法にもとづいて対象者の死亡予定24時間前前後に届けられる用紙。ここには、氏名、生年月日、本籍、住所、死亡予定時刻が書かれているうえ、一応形式的に（？）「貴方のご冥福を心からお祈りいたします」とのお悔やみ文も。

そんなイキガミを配達するのがイキガミ配達人だが、イキガミ配達人はれっきとした国家公務員で、エリート職……？ この映画の主人公はイキガミ配達人の藤本賢吾（松田翔太）だ。また、この映画ではイキガミの配達を受ける3人の若者たちの姿が描かれる。イキガミ配達人はあくまで任務に忠実であるべきだから、受領者に対して過度な干渉をしてはならないという義務を負っている。しかし、受領すれば必ず24時間以内に死亡するというイキガミを受け取った人間に、さまざまなドラマが生まれるのは当然。そんなウソ偽りのないイキガミ受領者たちの人間ドラマに否応なく入り込んでいく中、藤本の人生観はどのように変わっていくのだろうか……？

この映画は死んでいく3人の若者たちの悲劇を描き、またイキガミ配達人藤本の苦悩と葛藤を描いているが、決して観客を1つの結論に誘導しようとはしない。つまり、こんなニッポン国になったらどうするの？ と考える時間的余裕はまだあるわけだ。さあ、あなたはこの映画からどんな問題提起を……？

柄本明と笹野高史がいい味を！ 劇団ひとりにも注目！

今大講堂で藤本賢吾たちイキガミ配達人となる予定の国家公務員が聞いているのは、「国家繁栄維持法」についての参事官（柄本明）の訓話と解説。また、その後イキガミ配達人の実務にも少し馴れた藤本に対して、日々業務命令を与えている直属の上司が石井課長（笹野高史）。

柄本明も笹野高史もたくさんの映画に登場しているベテラン俳優だが、この2人が『イキガミ』では、あたかもナチスドイツの幹部のように、息を合わせて（？）不気

味な役柄を演じている。国家繁栄維持法の是非やその賛否はともかく、こんな時代状況の中で自我を押し殺して生きている(?)、2人のベテラン俳優が見せるいい味に注目!

ちなみに、参事官の訓示に対して、「まちがってる!」と叫んで1人異を唱えたのが島田。彼には、恋人が国家繁栄維持法によって死亡したことがどうしても納得できないらしいが、それこそ参事官が言う退廃思想! もちろん、島田は即座に逮捕され、以降何ゴトもなかったように訓示が続けられたが、毎年1人はああいう輩がいるらしい……。そんな島田を演ずるのはユニークな活動を続けている劇団ひとりだが、彼の出番はこれだけ……。? そんな劇団ひとりにも注目!

対象者その1——「ゆず」と対比しながら「コマツナ」を

「コマツナ」というデュオ名でストリートミュージシャンをしているのが、メインボーカルの田辺翼(金井勇太)と、作詞・作曲を担当している森尾秀和(塚本高史)の2人。1998年にメジャーデビューし、今や大成功を収めている男性デュオが「ゆず」だが、「ゆず」の北川悠仁と岩沢厚治の2人がかつて横浜でやっていたのと同じことを、この映画では「コマツナ」の2人がやっている。

「ゆず」の場合は2人が一緒にメジャーデビューできたからよかったが、「コマツナ」の場合は音楽事務所がスカウトしてきたのは田辺だけだったから、以降2人はヘンな関係に。しかも今、田辺がデビューしようとしているのはソロではなく、相棒を支えるサブの役割として。それでもデビューできるだけマシ。誰でもそう思うし、田辺もそう考えて頑張っていたが、テレビの歌番組へのナマ出演の前日に田辺に届いたのがイキガミ。あと1日しか命がないと知った田辺は、今もお汗まみれになってアルバイトしている森尾の元を訪れ、もう1度一緒にあの時の歌『みちしるべ』を歌いたいと言い出したが、さて森尾の対応は……。?

また、テレビカメラの前で突然田辺が相棒を無視して「私が最後に歌いたい歌はこれです!」と宣言したうえで歌い始めたのが『みちしるべ』。さあ、番組関係者はてんやわんやだが、逆にこの田辺発言と田辺の歌声にこそ、つくりものではないホンモノの輝きが……。

■対象者その2——お兄ちゃんとさくらの物語は感動的！

「お兄ちゃんとさくら」と言えば、日本人なら誰でもご存知の、渥美清扮するフーテンの寅さんと倍賞千恵子扮する妹さくらの物語を思い出すが、『イキガミ』におけるお兄ちゃん飯塚さとし（山田孝之）と盲目の妹さくら（成海璃子）の物語は感動的！

さくらが両親を失うとともに盲目になったのは、幼い頃父親が運転し、親子4人が乗っていた車が交通事故にあったため。前部座席に乗っていた両親は即死したものの、後部座席だったためケガだけですんだお兄ちゃんは「絶対お前を守ってやる！」と宣言し、今日まで懸命に頑張ってきた。もっとも、このお兄ちゃんもフーテンの寅さんと似たところがあるよう。すなわち、人はいいし調子はいいものの、実力は伴っていない様子。ところが、そのさとしが今施設に入っている妹を迎えにきたのは、ちゃんとした仕事に就いて高収入を得ており、兄妹で一緒に住む部屋を見つけたためとのこと。そりゃすばらしいが、さてその話はどこまでホント……？

ところが、そんな希望いっぱいのさとしの元に届いたのがイキガミ。映画冒頭に登場するイキガミ受領者鴨井洋介はやケになって、昔自分をいじめた奴に対する復讐に走ったが、さとしはどんな行動を……？ そう思っているとさとしは、どうせ自分は死んでいくのならさくらへの角膜提供のドナーになろうという決心をしたから立派。その後、さくらの主治医である近藤医師（井川遥）や多くの職員、入院患者たちの協力を得て、ある大芝居が展開していくことに。お兄ちゃんとさくらの間で角膜移植を軸として展開される兄妹愛いっぱいのストーリーには、きっとあなたも涙を流しながら感動するはず……。

■対象者その3——風吹ジュンも熱演！

風吹ジュンは秋吉久美子と並んで、若い頃から私の大好きな女優。1952年生まれの彼女は既に50歳を大きく超えたが、その美しさは若い頃とほとんど変わっていない。もっとも、最近の彼女は年齢上お母さん役が多くなっているが、『イキガミ』では、何と田中真紀子氏ほどの名演説はできないものの、国家繁栄維持法を熱烈に支持する国会議員滝沢和子役をショートヘア姿で熱演！

去る9月1日の福田康夫総理の電撃辞任発表以降、衆議院の解散・総選挙に向けて

各党が走り始めたが、この映画でも投票日が迫る中、和子の危機感は相当なもの。和子が今しきりに訴えているのは国家繁栄維持法の意義と役割についてだが、そんな抽象的な争点のアピールでガソリン高、物価高に苦しむ国民の支持を得ることができるの……？ また、ストーリーが進行するにつれて、和子がかつては国家繁栄維持法に反対する「退廃思想」の持ち主だったが、あるきっかけによって「転向」したらしいことが明らかになるから、事態はややこしい。

他方、国会議員という母親の期待と重圧に耐えることができなかった一人息子直樹（佐野和真）は、今は完全なひきこもり人間になっていた。かつての赤紙と同じように（？）イキガミが平等に配達されていることは、現職の国会議員滝沢和子の一人息子である直樹にも届けられたことによって明らかだ。もっとも、藤本が直樹に対してイキガミを届けた時、直樹は首吊り自殺をしようとしていたから、藤本がそれを無理矢理制止したうえで、直樹にイキガミを手渡したことに一体何の意味があるの……？

さらに、最大の問題点は自分の息子にイキガミが届いたことを自分の選挙に最大限活用しようとした和子の姿勢。イキガミを受け取った息子が国家繁栄維持法のため、そしてお国のために立派に死のうとしていることを有権者にアピールした和子の演説は聴衆に大受けだったが、さてその結末は……？

イキガミ対象者や遺族の権利は？ その告知は？

国家繁栄維持法によれば、イキガミの配達は死亡予定時刻の24時間前とされている。ちなみに、イキガミを受け取った人間には公共施設、公共交通機関を自由に使用できる権利が与えられ、また遺族は国繁遺族年金を受け取る権利があるらしい。現に田辺はテレビ局に駆けつける前、茫然自失状態でレストランに入り、死亡予告証を提示して「何でも高い料理から順番に出して」と注文していたから、その権利は使わなければ損……？ もっとも、映画の冒頭に登場した鴨井のように、ヤケになって犯罪を犯すと遺族は国繁遺族年金の受給資格を失ううえ、賠償責任を問われるらしいから、対象者は行動を慎重にしなければ……。

他方、イキガミ配達人はイキガミ配達に伴うそんな効果を対象者に明確に告知したうえで、お悔やみの言葉を述べなければならぬからその役目は結構大変……。

配達の実務は結構難しい！

そこで誰もが疑問に思うのは、イキガミの配達ってそんなにきっちりとできるの？ということ。例えば対象者が海外旅行中であつたり、病気で入院中の場合はどうなるの？ 国家繁栄維持法は、配達員が訪問時に対象者が不在だった場合、代わりに「不在票」を置き、不在票を確認した対象者はサービスセンターを通じて予告証の配達を年中（深夜・休日も含み）要求できると定めているらしい。しかし常識的に考えても、さらに私がスクリーン上で観るイキガミの配達体制によれば、いくら手を尽くしても24時間前にイキガミを配達できないケースはいくらでもありそう。するともし、イキガミを受け取ることができないまま、突然死んでいく対象者がいるとすれば、それは国家による重大な告知義務違反では……？

第3章

意外な設定が興味をひく

朝日新聞「素粒子」で「死に神」と表現された鳩山邦夫前法相の激怒は当然だが、イキガミとは？ これは生き神ではなく、死に神、つまり死に予告証だ。

近未来の日本は小学校入学前の予防接種によって、千人に一人の確率で「十八〜二十四歳の遊紙に死にます」という物騒メジャーデビューを夢見

日本をこんな国にしたいの？

るギターデブの計割れ田辺の国憲法を強く支持する女性国会議員の引きこもり息子③の出来損ないだが、交通事故で幼い時盲目となった妹に優しい飯塚の三人。龍本智行監督は、彼らの人生を丁寧に描いたうえで、突然届いたイキガミに苦悩する若者を明確に提示する。彼らは残り二十四時間の人生をいかに生き、いかに死んでいくのか？ その壮絶さには、きつと感動と怒りを覚え、涙を流すはずだ。

一方、エリート官僚のイキガミ配達人に必要な資質は無感動と無関心、見える、聞かざる、言わざるの精神で着実に届けるのが任務。受領者への過度な干渉は厳禁だから、三人の最初の二十四時間に人間として深くかわった配達人藤本（松田翔太）は「退廃思想」の持ち主として国家処罰の対象に？

現実の日本国は五人の「役者」が演じる某政党の総裁連一色だが、今秋にも予想される総選挙後の国会運営が機能マヒを起せば、近い将来日本はこんな国に？ 人気コミックスの映画化には少々食傷気味だが、本作は別。原作の持つ壮大な世界観・国家観・人間観を、内外ともに大きな危機に直面している日本国の現状と重ね合わせるなら、しっかりと勉強したい。



「イキガミ」

27日からT O H O シネマズ梅田ほかで公開

大阪日日新聞 2008(平成20)年9月20日

この映画はそんな枝葉末節の手續問題（？）には触れていないが、いざ本格的に国家繁栄維持法を制定・施行するとなれば、そんな細かなところまできちんと配慮した法律にしなければ……。

たかがコミックと侮ってはダメ！

この映画の原作である間瀬元朗の『イキガミ』は、2005年1月以降『週刊ヤングサンデー』誌に連載されてきたコミックだが、その問題提起の鋭さはたいしたもの。したがって、たかがコミックと侮ってはダメ。「国家繁栄維持法」の制定に見られる壮大な世界観、国家観、人間観は、ヒトラーの台頭や日本軍国主義の台頭という過去の歴史と対比しながら注目する必要がある。

飯塚さとし、田辺翼、滝沢直樹の3人がこの映画の中で見せる人生最後のドラマは実に興味深いもの。しかし、石井課長が言うように、藤本がそこから感じたことについては一切無視し、これからもひたすら国家公務員としてイキガミ配達人の仕事に邁進すればいいの……？ 重大な規則違反を犯した藤本が処分を受けたのは当然だが、それは「〇〇！」「△△！」と叫びたい心の声をかろうじて抑えたため。瀧本智行監督はこの映画をそれ以上の政治闘争ドラマとしていないが、近い将来この国には革命が起こるのでは……？ すると、その革命のきっかけとなるのは一体誰の、どんな行動？

そんなことまで考えながらこの映画を観れば、あなたの世界観、国家観、人間観は大きく成長するはず。

2008(平成20)年9月4日記